

第295回くらしの植物苑観察会 令和5年10月27日(金)

「世界からみた日本の漆」

日高 薫 (当館情報資料研究系 教授)

「ジャパン japan」 = 「漆」？

今回の植物苑観察会では、日本の植物文化史において重要な位置を占めるウルシの塗料としての利用を、グローバルな視点からとらえてみたい。

16世紀以降の国際市場の拡大とともに、日本製漆器は、東アジアのみならず、世界のより広範な地域に流通するようになる。ウルシはアジア以外では生育せず、塗料としての漆も未知の素材であったことから、東洋製漆器は王侯貴族など富裕な人々の蒐集・愛好の対象となり、彼らの財産目録には、漆や漆器を示す言葉として、しばしば「ジャパン japan」の語が登場するようになった。これは磁器の「チャイナ china」と対をなす用語であり、当時のヨーロッパで、漆器が日本を代表する特産品ととらえられていたことを反映している。ただし、この小文字の「j」で始まる「ジャパン」という語は、17世紀から18世紀頃の文献に見られる古語であり、またその意味するものも、日本の「漆」と必ずしも同義ではないことを理解する必要がある。



岩手県二戸市浄法寺町のウルシ林



ウルシの実

天然漆の種類

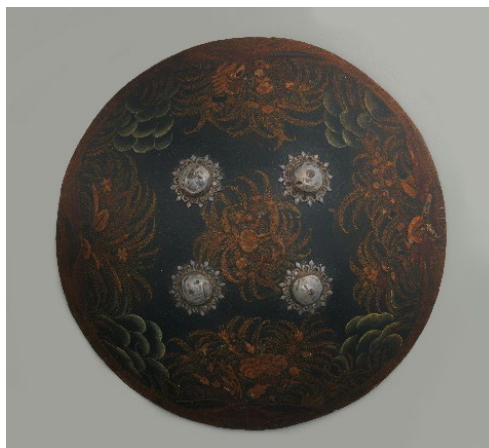
ウルシ科の植物には81属800種ほどがあり、広く世界に分布する。しかし、樹液を塗料として利用する文化は、中国、朝鮮、日本、インドシナなど、アジアの地域に限られる。現在確認できている天然漆は、日本や中国の漆のほか、ベトナムの漆、タイの漆の3種が知られている。

日本・中国・朝鮮・琉球	Toxicodendron verniciifluum (Rhus vernicifera)	Urushiol	ウルシ (ウルシノキ)
ベトナム・台湾 (アンナン漆)	Toxicodendron Succedaneum (Rhus succedanea)	Laccol	ハゼの木の変種
タイ・ミャンマー・カンボジア (ビルマ漆・ミャンマー漆・ カンボジア漆)	Gluta usitata (Melanorrhoea usitata)	Thitsiol	ブラックツリー

漆に似た塗料

「ジャパン」と呼ばれた「漆器」の中には、東アジアや東南アジア製の天然漆による漆工芸品のほか、広く西洋製の塗りもの（ジャパニング japaning, japanning）や、インドなどの地域で製作された漆様の塗料を用いた工芸品も含まれていた。語義としては、現代英語の「ラッカー lacquer」の用例に近いと考えていただければよいだろう。疑似漆の技法は、世界の様々な地域で発達したが、その中には、東洋製漆器が知られる以前から定着していたものも少なくない。

西洋の各国で用いられる「ラッカー lacquer（英）」
「ラック lack（独）・laque（仏）」などの語は、東南アジアやインドで発達した「ラック lac」（ラックカイガラムシ *Laccifer lacca* Kerr の分泌物）を用いた天然塗料に由来する。ラックカイガラムシはインド・東南アジア・中国雲南省南部等に分布し、中国では紀元前から染料（紫鉱）として利用されていたようである。また漢方薬（紫梗）としても知られ、正倉院にも「紫鉱」として伝わっている（北 123）。塗料としてのラックの利用については不明な点が多いが、その技術は16世紀ごろにはイタリアの港町ヴェネツィアを窓口としてヨーロッパにも伝わり、瞬く間に広まって様々なバリエーションを生み出した。



インド製ラックの盾

大航海時代以降、日本製や中国製の漆工品が流通するようになると、ヨーロッパの人々は、これらを「ラック（漆器）」の一種と認識した。ただし、東アジア、とくに日本製の漆器は、従来知られていたラック製品を遙かに上回る品質であったため、ラック製法を改善して優れた模倣品を製作する試みが各地でおこなわれることとなる。ヨーロッパ各地のジャパニング工房は、すでに知られていた技術を応用して良質の塗装技術に発展させるにとどまらず、新たな美的創造力のもと室内装飾や工芸の分野に貢献し、著しい展開を見せた。

ところで、疑似漆の技術は、メキシコやグアテマラなどラテンアメリカにおいても極めて早い時期から発達している。時代や地域によっても異なるが、昆虫から抽出されるアヘ（aje）油や、チア（chia）という植物の種油に、鉱物の粉末を加える製法が代表的である。アヘは、カイガラムシの仲間の昆虫（*Llaveia axin axin*）から直接脂肪分を取り出したものであり、ラックに極めて近い性格の素材である。

ヨーロッパにはウルシという植物もそれを用いる文化もなかったため、西洋人は、自らの知識の範囲内で東洋製の漆器を理解し、認識や用語上の混乱を生じることとなった。日本の漆が植物性の天然塗料であるという事実が広く認識されるのは、19世紀に入ってからのことである。東洋製の漆工芸品の流行は、多くの模倣品を生み出し、世界の「漆」の文化に大きな影響を与えたが、その基盤に、広範な地域で発達したラック塗装の技術があったことは重要である。

.....

次回予告 第296回くらしの植物苑観察会 令和5年11月25日（土）

「浮世絵に見る菊」

平野 恵（台東区立中央図書館 専門員）

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要 定員30名